



TITLE:

兩魏の戸籍と唐の差科簿との関係 と課の意味の變遷

AUTHOR(S):

曾我部, 靜雄

CITATION:

曾我部, 靜雄. 兩魏の戸籍と唐の差科簿との関係と課の意味の變遷. 東洋史研究 1959, 17(4): 457-480

ISSUE DATE:

1959-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/148124>

RIGHT:

兩魏の戸籍と唐の差科簿との關係と課の意味の變遷

曾 我 部 靜 雄

目 次

- 一 中國の力役制度の原則
- 二 唐の差科と差科簿
- 三 差科簿の成立と課の意味の變遷
- 四 課の解釋について我が東洋史學者に望む

一 中國の力役制度の原則

漢の武帝の時に儒教が國教と定められてから、以後の歷代の王朝は、いづれもこの定めを遵奉して變る所がなかった。従つて儒教に於ける禮、殊に周禮や禮記の王制篇は、中國の各時代の法律制度の母體をなすに至つた。各時代の律令の根源は多く周禮や禮記の王制篇に求めることが出来る。中國の力役制度の根源も矢張りこれ等の書に求め得られる。即ち周禮地官篇の卿大夫の職掌の所に、

歲時を以て、その夫家の衆寡を登め、その任すべき者を辨ず。國中は七尺より以て六十に及び、野は六尺より以て六十有五に及ぶまで、皆これを征す。その舍すものは、國中の貴者・賢者・能者・公事に服す者・老者・疾者にして、皆舍し、歲時を以てその書を入る。

とある一文は、力役に従う階級とそれを特に免ぜられる階級とを規定した重要な史料であつて、後世の力役制度の原則は、實にこの一文に存在すると言つても過言ではない。この文中にある七尺とは唐の賈公彥の註によると二十歳のことであり、六尺とは十五歳のことであるが、力役に従うものとしては、國中即ち都市では二十歳から六十歳までのもの、野即ち鄉村では十五歳から六十五歳までのものであり、勿論これ等は男子だけであつて、女子は力役に従わな

いものである。このように周禮では力役は都市には軽く鄉村には重くなっているが、これが後世に影響して、後世でも力役は都市には原則として無かつたり、又有つても輕いものであつて、鄉村には重い力役が課せられたのである。

更に周禮のこの一文の中で後世に非常な影響を及ぼしたものは、貴者・賢者から老者・疾者に至るまでの階級に對しては、力役が免ぜられる、と言うことである。これは施舍の制度と稱せられて、周禮にはこの地官篇卿大夫の職掌の外にも各所に散見している。又春秋左氏傳などにも散見し、更には又禮記王制篇にもこれと類似の規定が見えている。この周禮の施舍については後漢の鄭衆及び鄭玄や唐の賈公彥が詳しい説明をなしており、又王鳴盛の周禮軍賦説の辨可任や、王聘珍の周禮學や、我が藤田幽谷の勸農或問などにも詳論されている。いずれの説明もこれは宗室・有位者・官吏・公吏・老人・疾病者に對する力役免除のこととしてゐる。私も拙著「均田法とその税役制度」にこのことを詳論してある。この施舍の制度は周から清朝の滅亡に至るまで行われた力役制度上の鐵則であるが、不幸なことには我が東洋史學界では、これ等官吏などの特殊階級に

は、力役の外に租税までも免ぜられると言う謬説が一般に行き互つて殆んど學問的常識となり、これから幾多の弊害が我が東洋史學に現われて來て居る現状である。

以上の如く、二十歳から六十歳まで、或は十五歳から六十五歳までの男子は力役に從うと定めてある周禮には、又力役の期間及び力役の種類の規定も見えている。即ちその地官篇均人の職掌には、

凡て力政をひとし均くするに歳の上下を以てす。豐年は則ち公こと
(事即ち力)にはひとし旬く三日を用い、中年は則ち公には旬く
(役の意)二日を用い、無年は則ち公には旬く一日を用う。

とあり。禮記の王制篇にも、
 民の力を用うることは、歳に三日に過ぎず。

と見えてゐる。周禮と禮記を合せ考えるに、一年に三日の力役が原則と言うにある。この力役は一般的なものであつて、これは後世の均田法完成時代の歳役(その代償は庸)や普通の雜徭に當たるが、この外に矢張り均田法完成時代の雜徭の特殊なものである雜役(色役、或は雜色)に當たるものの規定も周禮に見えている。即ち周禮の天・地・春・夏・秋の各篇の初めにある序官は、普通の記載では、

大夫幾人、士幾人、府幾人、史幾人、胥幾人、徒幾人、となつてゐる。この大夫と士とは國王が任命した官吏であり、府と史とは各官廳の長官が任命した胥吏であるが、胥と徒については、鄭玄は「天官篇冢宰の序官の所で、これ民の徭役に給するものなり。今の衛士のごとし。」

胥の讀みは謂の如し。其の才知あつて什長となれるを謂う。

と註している。鄭玄はこのような註を周禮の他の所でもなしている。この周禮の胥及び徒については、私は社會經濟史學第十五卷第三・四合併號に載せた拙稿「中國往古の胥吏制度」や法制史研究第一冊に載せた拙稿「仕丁と采女と女丁の源流」に既に説明して置いたことであるが、要するに周禮の序官の最下に列せられている胥及び徒は、民衆が力役の義務として各官廳に勞働奉仕をするものを言うのである。その勞働は精神勞働もあり、又肉體勞働もある。徒は十人一組となり、その一組の長として一人の胥が配置される。かく胥及び徒は力役の一種であり、しかも鄭玄の上記の註には、これを「今の衛士のごとし」と説明をしている。これは非常に重要な比較説明であつて、今、即ち鄭玄

が生存せる漢の時代の衛士の制度が、周禮の胥徒に當ると言うのである。この兩者の關係についても、上掲の拙稿「仕丁と采女と女丁の源流」中に述べて置いたが、この漢の衛士については漢舊儀（漢官儀や漢儀）註も大略同様）に、

民は年二十三にして正となり、一歳は以て衛士となり、一歳は材官騎士となつて射御・騎馳・戰陳を習う。（中略）年五十六にして老衰すれば、乃ち免ぜられて民となる。（下略）

と見えてゐる。これによると漢の衛士は、男子の歳二十三から五十五に至たる正卒と稱せられる期間中に、一カ年間従事する義務であつた。このような制度は、漢書食貨志にある董仲舒の上言によると、秦の制度を繼承したものであり、又正卒の開始年齢も景帝の時には二十歳であつたものが（漢書景帝本紀）、昭帝の時には二十三歳となつたのである（參照のこと）。衛士は首都の諸官廳の使役や警備に任ずるものであり、胥徒も亦、諸官廳の使役に任ずるものであるから、鄭玄がこれを同類のものとしたのは至當な見解である。この漢の衛士はその在役期間は一カ年であるから、胥徒の在役期間も亦一カ年か、或はその前後のものであると

鄭玄は見做していたのであろう。普通の力役が三日間であるのとは、その性質が大いに異つている。

漢の衛士は、その名稱からすれば、首都の警備に専念する兵士の如く思われるが、實際は諸官廳の使役兵に過ぎなかつた。このようなことは、その後の時代にも行われたのであつて、例えば魏書卷七下、高祖孝文帝本紀下には、

太和二十年冬十月戊戌、代選の士を以て皆羽林虎賁となす。司州の民は、十二夫に一吏を調して四年の更卒となし、歳に番假を開いて以て公、私の力役に供す。

とあるのや、隋書卷二十七、百官志の北齊の官制を述べた中に、(通典卷三十八職官篇の北齊職官にも見ゆ。)

後齊(即ち北齊)の官を制するや、多く後魏に循う。(中略)諸の省臺府寺より各々その繁簡によつて吏を置く。令史・書令史・書吏の屬あり。又各々曹兵を置いて以てその役に供す。その員は繁簡によつて立つ。

とあるなど、北魏や北齊でも更卒とか曹兵と呼ばれる兵士が、中央諸官廳の義務的な使役人となつたのである。宋時代の地方の軍隊である廂軍も、その名は軍隊であるが、その任務は多くは地方官廳の常備人夫に過ぎなかつたのも、

このような類のものであろう。

二 唐の差科と差科簿

このように周禮に規定されている力役には兩種があつてそれは一般的のものと特殊なものであるが、この規定は後世の力役制度に大きな影響を及ぼしている。特に西晋から始つて唐の徳宗の時に終る均田法時代の力役制度には、周禮のこの原則が遺憾なく織込まれている。均田法の完成期に於ける力役は、これを大別して歳役と雜徭となるが、歳役は中央政府が主催するものであつて唐では廿日間の力役であり、雜徭は地方官廳の主催するものであつて、唐では四十日間の力役であつた。これ等の力役に従わぬ場合は物を以て代償するを要し、歳役の場合はこれを庸と言ひ、雜徭の場合は總じて何と稱したかは明確に判らないが、資課か或はこれに類似の名稱で呼ばれていたようである。かく均田法完成期の力役は二つに大別されるが、仔細に力役の内容を検討するならば、兩者のいずれの原則にも合致しない力役が存在する。それは雜役、或は色役、或は雜色役などと總稱せられるものであつて、これを催課する主體は

中央政府でもあり又地方官廳でもあつて、而もその在役期間は一カ年以上の長期に亙るものである。全く歳役と雜徭との外に存在するのである。しかし均田法完成期の唐の制度は力役を以て歳役と雜徭との二つに分けて、第三の力役の存在を認めていないから、この雜役は便宜上、雜徭の中に包含されて、その特殊なものとして取扱われていた。我が班田收授法時代の力役制度は、中國のこの制度を繼承しこれと同様なものを實施しているのである。これ等については私は拙著「均田法とその税役制度」中に詳述してある。

雜徭の特殊な役である雜役(色役、或は雜色役とも言う)は、その在役期間が長期に亙ることが特色とする所であつて、一定期間無交代で勤務するのを長上と言ひ、交代するものを番上と言ひ、無報酬で公務に服するのが原則であり、その主なるものは各官廳の使役人となつたり、位官者の僚人となつたり、又地方鄉村政治機關の責任者となるものであつて、所謂色役人である。その數も夥しいものであつて、大唐六典卷三戸部の「凡賦役之制有四、一曰租、二曰調、三曰役、四曰雜徭」と唐の均田法時代の賦役四種を述べた所に、

開元二十二年、敕、おもえらく、天下無事なり。百姓の徭役は務めて減省に従うべしと。遂に諸司の色役二十二萬二百九十四を減ず。

とあることでも判るのであり、玄宗の開元二十二年に諸官廳の色役人を減少した數が二十二萬餘人にも達すると言うのである。尙おこの一文は唐會要卷八十三租税上にも引用されているが、それには開元二十二年は開元二十三年に、二十二萬二百九十四は一十二萬二百九十四人となつている。このことは中島敏氏が既に鞠清遠氏著唐代財政史の同氏の譯註の中で指摘している。六典と會要のいずれが是なるかは判らない。

雜徭の特殊な役である雜役(色役、或は雜色役とも言う)に總括されるものの中で、兵役は最も重難な役とされていた。隋・唐の均田法時代や我が班田收授法時代の府兵制度は、西魏のそれを繼承したものであることは、よく知られている所であつて(資治通鑑卷一六三)、その兵役は我が類聚三代格卷十八、平城天皇大同四年六月十一日の太政官符、應加増徭分雇役兵士事の條に、

右、右京職の解を得るに稱わく、雜徭の中、兵士は尤も

苦し。

と言っているが、これは單に我が國だけのことではなく、中國でも同様であつたのである。従つて令の條文でも、兵役は廣く言へば雜徭の一種であるにも拘らず、これを一般の雜徭から切り離して、特別なものとして取扱つてゐる。

例えば唐律疏議卷三の名例律に諸除名者、官辭悉除、課役從「本色」とある條の疏議に、

又令に依るに、除名されて未だ敘せざる人は、役を免ぜられて庸を輸するも、並に雜徭及び點防の限りに在らず。

(原文、又依令、除名未敘人、免役輸庸、並不在雜徭及點防之限、)

どあり、又我が養老の賦役令、除名未敘の條に、凡て除名されて未だ敘せざる人は、役を免ぜられて庸を輸す。身を役するを願うものは、これをゆるす。その應に庸を収むべきものも亦、雜徭及び點防の限りに在らずとある。この日唐の二條文は、除名者、即ち官吏の名籍から一時除かれた者に對する力役の賦課を規定したものであつて、その力役としては歲役(その代償は庸)・雜徭・點防の三種を擧げている。これについて我が養老の義解は、

謂うは、除名の人は、庸を輸するの外、更に亦兵士及び衛士に點するを得ず。

と説明し、養老の集解には、

釋云う、兵士及び衛士に點するを得ざるを、雜徭及び點防の限りに在らずとなす故なり。

穴云う、問う、文に云う、應に庸を収むべき者と。亦雜徭及び點防の限りに在らざる者と。未だ知らず、若し身を役するを願ひ而も聽ざるを得し人は、雜徭にさつ差さわし、及び點防すべきか。答え、十日の歲役は願ひに隨つて役すべきも、自餘の雜徭と點防とは、すべからず。云云。

とある。點防の點は養老の宮衛令兵衛衛士の條の義解には「少墨を以てその名上に點しすなり」と言い、集解の釋云には「點は小墨なり」と説明している如く、墨を以てマークをつけて檢出するを言うのである。従つて點防とは防人に簡點されることを言うのである。防人は兵士の一種であるが、養老の營繕令貯庫器械の條にも「在京のものは、須もちうる所の調度人力は太政官に申して處分す。在外のものは、當處の兵士及び防人を役し、調度は當國の官物を用う」とあ

つて、兵士と防人との二名稱を掲げて區別して居る如く、防人は普通の兵士の中には入れて取扱わない傾向にあつたのである。これは防人が兵役の中でも最も重い特殊の任務を持つていたので、特に兵役の中からこれのみを抽出して別扱いにして居るのであらう。このようなことから考えるに、ここに論じている日唐令の「雜徭及び點防の限りに在らず」の點防とは、兵役の中の代表的な防人を舉げて兵役を意味しているのであらう。然らずして防人のみを意味するとすれば、雜徭及び防人の限りではないが、兵士の限りではあることとなり、雜徭・防人以外の兵役には服することとなつて、甚だ矛盾にみちたこととなるのである。尙お簡點・雜徭のことは、羅振玉の鳴沙石室佚書に含まれている唐の水部式にも、

河陽橋置水手二百五十人、陝州大陽橋置水手二百人、

(中略)其河陽橋水手、於河陽縣取一百人、(中略)其大陽橋水手、出當州、並於八等以下戶、取白丁灼然解水者、分爲四番、並免課役、不在征防・雜抽使役、及簡點之限、云云、

都水監、三津各配守橋丁卅人、於白丁・中男內、取灼然

便水者充、分爲四番上下、仍不在簡點及雜徭之限、云

云、

と見えてゐる。

均田法が完成した唐に於ける歳役及び雜・雜徭役の催課は、その中央的なものは計帳によつて行われ、地方的なものでは差科簿によつて行われた。唐代の計帳の實物は未だ発見されていないが、唐代の差科簿の實物は六種程既に學界に紹介されている。その内四種は歴史と地理第三十三卷に連載された那波利貞博士の論文「正史に記載せられたる大唐天寶時代の戸數と口數との關係に就きて」の中に一種の戸籍として紹介されているベリオ將來敦煌文書であつて、いずれも佛國々立圖書館所藏の玄宗天寶年間のものである。他の二種は仁井田陞博士著唐宋法律文書の研究第十五章戸籍の總説の所に一種の戸口冊として紹介されている故中村不折氏所藏吐魯番發見の矢張り玄宗の開元か天寶頃のものである。この那波博士の言う一種の戸籍、仁井田博士の言う一種の戸口冊をば私は差科簿と斷定して、昭和二十八年に出版した拙著「均田法とその稅役制度」などでそのことを發表して置いたが、最近、中華人民共和國の王永興氏も

北京で出版されている歴史研究の一九五七年（昭和三十二年）十二月発行號に「敦煌唐代差科簿考釋」と題して、私と全く同じ見解のもとに、前記那波博士紹介のベリオ將來敦煌文書四種を以て差科簿であると斷定されている。私とは全く獨立して研究し、私と同じ結果を得ているのである。差科簿のことは大唐六典卷三十縣令の職掌の所に、

差科簿は、皆親しく自から注定し、務めてこれを均齊す。

とある如く、この簿の作成は唐の均田法時代の縣令の職掌の中でも重要なものであつた。資治通鑑卷二百四十九、唐の宣宗紀、大中九年夏閏四月の條には、

詔すらく、州縣の差役が均しからざるを以て、今より縣ごとに、人の貧富及び役の輕重に據つて、差科簿を作つて刺史に送り、檢署し訖らば、令廳に錄す。役事あるごとに、令に委して簿に據つて差を定む。胡三省云う、今の差役簿はここに始る。

と見えているが、この唐の宣宗の時は既に均田法が崩壊して土地私有制度が行われて居り、租・調・庸・雜徭の四種の税役も租・調・庸が合して夏秋の兩税となり、この兩税とこれに加わらなかつた雜徭との二者が税役として行われ

ていた時代であつて、かく兩税法が行われるようになって、雜徭が依然として存在するから、これを催課するための差科簿も依然として存在し續けたものであり、しかもこれは次の宋にも傳つて、宋の差役簿になつたことは胡三省の註の通りである。

このように差科簿はどこまでも力役を催課するために作られるものであり、従つて差科とは「力役に差さしつか科す」と言う意味である。これについての史料は多數あるが、少し擧げるならば、唐大詔令集卷四、帝王改元の改元天寶赦の詔文に

侍丁は、それをして老を養わしめ、孝假は、その喪に在るを矜あはれむは（原文、侍丁者、令其養老、孝假者、矜其在喪）、これ王政優容として、情禮を申しむるなり。しかるに官吏は令式によらずして、多く雜役使す（官吏不依令式、多雜役使）。今より後は、更に然かるを得ざれ。（自今後、不得更然）

とある。これは玄宗の天寶元年正月一日に、天寶と改元した際に發布された詔の一節であつて、この詔文は文苑英華卷四百二十一にも載せられているが、この右に掲げた一節

は、侍丁や孝假にある者は令式では力役を免ぜられているにも拘らず、官吏は雜役を課する場合が多いのを禁じたものである。この赦詔は又舊唐書卷四十八食貨志上にもその要約が載せられてあり、それにはこの一節の所は、

天寶元年正月一日の赦文、(中略) その侍丁孝假は差科を免ず。(原文、其侍丁孝假、免差科)

となつてゐる。唐大詔令集に「雜役使するを得ざれ」と言う所が、舊唐書では「差科を免ず」となつてゐる。この兩者を比較すれば、差科は力役催課のことであるは、極めて明かである。更にこのことを一層明かにしているのは、

唐律疏議卷三、犯死罪非十惡とある條の課調依舊の疏議に、

侍丁は、令に依れば、役は免ぜられて、ただ調及び租を輸す。(原文、侍丁、依令、免役、唯輸調及租)

とあることで、先の舊唐書食貨志に「侍丁は差科を免ず」とある所が、疏議では「侍丁は役を免ず」となつて居り、差科と役とは相通ずるものであるをこれ亦明瞭に示して居る。しかも疏議には更に「調及び租を輸す」と言つて居るが、これは換言すれば、差科には租や調が含まれないこと

を示しているに他ならぬのである。我が養老の令文にも差科の語があり、例えば職員令の左衛士府の條には、

督一人、掌(上略)衛士名帳及差科(中略)事、

とある。この差科に對して、義解及び集解では、

義解、謂うは兵庫大藏に差配するの類なり。

穴云う、差科とは、謂うは、所々に差充して、主當せしむるなり。

跡云う、差科とは、謂うは、衛士らが所々に差充さるなり。

と解釋している。同様な解釋が養老の賦役令の差科の條の差科に對してもなされてゐる。中國の解釋とは言葉が異なる意味は同様なものであつて、力役を科するものとしてゐる。徳川時代の律令學では最も正しい知識を持つていたと私は思つてゐる藤田幽谷も、その著の勸農或問では、この差科に對して「ヤクヲカケル」との假名を付している。この差科の地方に於ける實施は、唐では差科簿によるのであるが、その差科簿の實例三種を左に掲げよう。

一、那波利貞博士紹介佛國々立圖書館所藏敦煌文書登錄番號第三五五九號のもの。

(前略)

貳伯伍拾柒從化鄉

壹伯壹拾柒人破除

貳拾參人身死

曹稍稍 康希一 康大祚 曹忠兒 曹毛毛 曹咄利支

安奴子 羅忠子 曹思鸞 何元賓 何元炭 安薄鼻

(残りの人名は略す)

參拾伍人逃走

石拂羅壇 何山海 何進朝 羅拂紀 米任職 康薄鼻

安射勿盤陀 安加沙 康庭芝 辛大慶 辛利連

安將軍 (残りの人名は略す)

貳拾柒人没落

羅勿沙 曹羅漢陀 安思明 裴奉宣 何紹 安思諫

石同兒 安咄迦 加嗣琮 新城長上 史万希

康之目返 康胡念 (残りの人名は略す)

參人虚掛

羅磨娑 石伏願 康者羯

參人廢疾

安能迦 米炎帝 郭小緊

貳拾參人單身土鎮兵

羅思明 安烏蘇密 康莫論 石失忿 石裕娑 羅鐺娑

石承濟 李鵠子 史苟苟 石炭昏 石忿鼻 何得俊

(残りの人名は略す)

參人單身衛士

米忠信 何小胡 曹南達

壹伯肆拾人見在

壹拾人中下戸

曹大慶 載冊九 上柱國

男 安國 載冊八 上柱國子

弟 引吐迦寧 載冊七 衛士

寧男 海元 載冊一 中男

弟 米氈 載冊四 上柱國終服

弟 大明 載冊 上柱國終服

安沙庭 載冊九 上柱國翊衛

弟 守德 載冊六 上柱國翊衛

弟 守礼 載冊五 上柱國子弟

安邊庭 載冊二 四品孫子弟

弟 伏帝返 載冊 四品孫

壹拾人下上戸

(下略)

二、故中村不折氏所藏のもの二種。

A、名山郷 交河城

戸一百八十一 應堪差科

戸二 全家外任

戸一 下上

戸劉虔感 年卅九 安西戸曹

戸一 下中 知半日

戸王行徹 年五十二 焉耆戸曹

男 承咄 年廿八

男 承件 年廿六

男 承暉 年廿四

戸一百八十八見在計

戸四 下上 各一日計四日

戸高虔惲妻劉 年卅九

戸曹温意 年五十八

B、戸張好達 年六十五 老

戸索雄猛 年卅 輸丁

戸王大索 年卅五 鎮兵

戸宋汨答 年六十 老

右に掲げた三種のものの中で、故中村不折氏藏Aの第二行目には「戸一百八十一、應堪差科」とあり、差科のために作られるものなるを明かにしている。而も那波博士紹介のものも故中村不折氏藏のものも、いずれもその内容は雜徭の特殊なものである雜役（色役、或は雜色役とも言う）に関する記載に満ちて居り、その中でも特に兵役についてのものが多い。兵役關係の事項を特に抽出記載している。これは既に説明した日唐の令の條文に「雜徭及び點防の限りに在らず」とあることが、その條文通りに實際に行われていたことを物語っているのである。

三 差科簿の成立と課の意味の變遷

唐の時には力役催課のために中央には計帳があり、地方には差科簿があつたことは既に述べた所であるが、この均田法に於ける計帳は西魏の時に創められたもので、周書卷二十三蘇綽傳に、

蘇綽は始めて文案の程式、朱は出だし墨は入ると、及び計帳戶籍の法を制す。

と見えている。差科簿が創められた時は不明であるが、均田法の計帳の發生の西魏頃か或はそれ以後であつたのではなからうか。上記の蘇綽傳に「計帳戶籍の法を制す」とあるは、計帳と戶籍とは別々のものであり、計帳と戶籍の二種のものが均田法に於いて作られるようになったことを意味している。勿論、蘇綽のこの法の制定以前から中國には計帳も戶籍もあり、そのことは拙著「均田法とその稅役制度」の中に述べてあるが、この計帳と戶籍をば均田法の實施に適するように改めたのが實に蘇綽なのである。

計帳は元來地方から中央に出だす戶口數などを記した會計報告書であつたのを、西魏の蘇綽の改正によつて課役を催すためのもの、即ち力役催課のためのものとなつたのである。計帳の持つ使命が非常に異つて來たのである。このような計帳を戶籍の外に作つたと言うことは、戶籍には課役催課關係の事項は記載しないことを意味するのであり、若し戶籍にそれを記載するのであれば、戶籍の外に計帳を作る必要はないのである。實際、又西魏以後に作られた敦

煌發見の多數の唐代の戶籍には、課役即ち力役催課の事項は記載されて居らず、力役催課の事項は、既に掲げて置いた差科簿の例で判る如く、地方のものは地方の計帳である差科簿に記載されていることからしても推知されるであろう。このことを一層明らかにする史料が近頃現われた。それは山本達郎博士が東洋學報第三十七卷に載せた「敦煌發見計帳樣文書殘簡——大英博物館所藏スタイン將來漢文文書六一三號——」で紹介した兩魏時代の敦煌の戶籍である。兩魏の戶籍は西曆五四七年（西魏大統十三年）（東魏武定五年）に作られ、現在の形は十七枚の斷片を順序不同のまま貼り合せたものである。その十七枚を總合して見るに、戶口・土地・租調・力役のことが悉く記載されていることが判るのである。唐の戶籍は戶口と土地が記載され、時には租⁽³⁾や調も記載されているが、力役のことが記載されたものは全く見當たらない。これは既に述べた如く力役關係のことは計帳及び差科簿に記載されるがためである。今、左にこの兩魏の戶籍の中から力役記載の部分を抜き出して掲げよう。

A、山本博士分類による第五枚、

都合 稅 祖 兩 拾 肆 餅 餅

拾陸石件所輸祖

九石五升上

四石五升不課戸上税
五石臺資口計丁床税

六石中

一石不課戸下税祖

柒餅件所折輸草拾件圍

三石折輸草六圍上

四石五升折輸草九圍中

都合課丁男參拾柒人

五人雜任役

一人人彌陟

B、山本博士分類による第十五枚

?〔閣

二人人虞候

參拾兩人定見?

六丁兵卅人

乘?二一人

都合應受田戸參拾參

戸六足

口六男隆老中小

牛一頭

卅畝麻

右件應受田壹頃壹拾陸畝正

八十畝正

戸六三分未足

口廿良口十一丁男

Aは本戸籍の第五枚であり、Bは本戸籍の第十五枚であるが、これは山本博士も上記の同博士論文に言われている如く、第五枚の次に第十五枚が續づくものである。この二枚の文書には、初めに租のことが書かれ、次には力役、その次には受田のことが記載されている。力役の部分は二枚を合せての中央部に當り、「都合課丁男參拾柒人」の行に始つて、「乗二人」の行に至るまでである。課丁男三十七人の力役の配分を記録したものである。これを前に掲げた那波博士紹介の唐の差科簿と比較するに、非常に類似していることが、發見されるのである。唐の差科簿では、最初に郷を單位に力役該當者の總數を言い、次に事故者の總數と

その細分とを述べ、それから見在者の總數とその戸等による細分とが述べられている。兩魏の戸籍の場合は、初めに課丁男の總數を言い、次に雜任役(役)の該當者の總數とその細分とが述べられて居り、それから定見として兵役該當者の總數とその細分とが述べられている。これより兩魏の場合の記載内容について、少しく述べよう。

課丁男總數三十七人の中で五人が雜任役に服すと言ひ、次にその雜任役の内容と、その各々に服す人數とが示されている。五人の中の一人は、山本博士の解讀では「攜陟」となっている。私は本文書の寫眞を見た結果、これは「陟陟」即ち「陟師」であろうと思う。陟即ち壘の古字は陟であり、又自と𡵓とは、壘の古字を𡵓とも𡵓とも書くことでも判る如く、これは相通することから、陟は師と見做すのである。陟師とは陟の保護の任に當る者を言うのであろう。那波博士紹介の差科簿の中にも渠頭、堡主、市壁師など、これと同類の名稱が見えている。

陟師の次の行は第十五枚の最初に當たるのであるが、惜しいことには切り取られて殆んど残つて居らず、僅かに最下部に閣の一字がほぼ明瞭な形で残つて居る。當時の雜任

役に屬する儼人の一種に直閣或は防閣と稱せられるものがあり、そのことについては私は藝林第五卷第五號所載拙稿「日唐の儼人制」に述べてある。故にこの行は多分「二人直閣」か「二人防閣」とあつたものであろう。この文書の閣の文字の上に極く僅に残つてゐる左側だけの文字の形は、𡵓ではなく直の字の左上部の形である故、直閣ではないかと思われる。これを二人とした理由は、雜任役は總計五人であり、その内一人は陟師、二人はこれから述べる虞候であるから残りは二人であり、この二人が行をなす人數であれば、直閣或は防閣が二人となる譯である。

雜任役五人の最後の行は「二人虞候」である。虞候は魏書卷十八、廣陽王深傳にも「ただ虞候・白直となる」とある如く、當時既に存在した軍鎮に於ける幕僚の一種である。

以上の五人が雜任役に充當されるものである。總數三十七人の中から五人を除いた残り三十二人は兵士の要員であり、これをば「參拾兩人定見(見?)」と言う理由は不明であるが、定見は「定まり現在す」の意味であらう。養老の戸令の新附の條に「見住に従つて定となす(從見住爲定)」

とあるのと同義のものであらう。三十二人の内譯は、三十人が六丁兵として六丁男が一組となつて一年を二カ月宛番上勤務する兵士であり、残りの二人は乘[?]即ち剩員で豫備員となつていたのであらう。府兵制度が創められたのは西魏の時であり、雜徭の制度が確立したのは、計帳の制度が出来た西魏か或はそれ以後ではないかと思われるが、この雜徭の中に兵役が雜徭の特殊なものである雜役（色役、或は雜色役とも言わる）の一種として含まれるようになっていた唐代に於いても、兵役は雜徭・雜役より切り離して取扱う傾向があつたことは既に述べた所である。この兩魏の戸籍は私が既にこれまで度々述べて來た如く、北魏・東魏・北齊の系統に屬し、北魏末頃の制度によつて作製されたものであつて、西魏・北周の影響は受けていないものであるが、その北魏時代——すくなくとも北魏末・兩魏初時代——には、兵役は雜任役の外のものとして取扱われていたことが、この兩魏の戸籍で明かにし得るのである。この制度が後々にまで影響して、兵役が雜徭——詳しく言えば雜徭の特殊なものである雜役——の中に包含されるようになっていた唐代でも、その痕跡が残り、我が國にまで及んでいたのである。これは

既に前節で述べた所である。

この兩魏の戸籍で特に注意するべきは雜任役と稱する制度語が用いられていることである。この雜任役の内容は、後の雜役（色役、或は雜色役とも言わる）と全く同一である。雜役は唐では雜徭の中に包含されてその特殊なものとして取扱われていたことは、既に述べた所であり、又唐の雜役の詳細については、濱口重國博士が東洋學報第二十卷第四號に載せた論文「唐に於ける兩税法以前の徭役労働」や、鞠清遠氏著唐代財政史（中島敏氏の譯本あり）の第五章第一節「色役與『貢課』」及び陶希聖・鞠清遠兩氏共著唐代經濟史（六花敏哉・岡本午一の譯本あり）の第七章第四節「色役與『貢課』」などに論述されて居り、その雜徭は課役の課に當たることも私が十數年來主張する所であるが、その雜徭の特殊なものである雜役の制度が既に雜任役の名稱で北魏末・兩魏初の頃までに確立していたことが、本戸籍によつて知ることが出来るのである。尙お雜任役の名稱も雜任（4）の語で唐の律令中には残り、一般には雜役、色役、雜色役と稱せられていたにも拘らず、前時代の名残りを留めていた。この雜任の語は我が國にも傳來して我が制度語として用いられた。これについては他誌で論ず

る筈である。又ここで注意して貰いたいことは、この論文で取扱つた本兩魏の戸籍第五枚の力役の部分の最初の第一行に「都合課。丁男。參拾柒人」とある課。丁男の三字である。課。丁男と書かれてあるは、本兩魏の戸籍ではこの第五枚だけで、他は悉く丁男、丁女の語が用いられている。而もこの課。丁男三十七人が負擔するものは何かと云えば、それは雜任役であり、兵役である。殊更に課。丁男と記して、そのものが負擔する雜任役と兵役とを擧げているのは、課。丁男と呼ばれる特殊な丁男が特別にこのような力役に従うものなるを雄辯に物語つているのである。然らば課。丁男の課が意味するものは雜任役であり、兵役であることを明瞭に示しているに他ならない。

私はここ十數年來、中國均田法の起源をなす晋の占田・課田法に現われる課は力役と解すべきであり、後に均田法の稅役としての一曰租、二曰調、三曰歲役、四曰雜徭の四種の制度が確立してからの課は、雜徭を意味するものなるを主張して來た。それ等はまとめて昭和二十八年六月發行の拙著「均田法とその稅役制度」の中に述べてある。更には、均田法の完成した唐の前の隋時代に課が雜徭の特殊な

ものである雜役を特に意味する場合があるを知り、これも拙著「均田法とその稅役制度」の第四章隋の土地稅役制度の所に一寸觸れて置いたが、昭和三十年一月發行文化第九卷第一號所載「唐の戸稅と地頭錢と青苗錢の本質」にはそのことを詳しく述べて置いた。それは隋書卷二十四食貨志に、

開皇八年五月、高潁奏すらく、諸州の課の調の無き處、及び課ある州も管戶數の少なきものは、官人の祿力は乘前已來、隨近の州より出だす。ただ判官は本と牧人たり。役力は理として部する所より出だすべし。請うらくは管する所の戸内より、戸を計つて稅せよと。文帝之れに従う。

とあるもので、これは高潁が地方官の使役人である幹や事力の差出方法の不合理を指摘して、この改正を隋文帝に要求した上奏文である。幹や事力は直閣防閑虞候と同様に義務的に官人に奉仕する雜任役即ち雜役の一種であり、そのことについては私は藝林第五卷第五號所載拙稿「日唐の倣人制」に述べてあるが、その幹や事力のことをこの上奏では「諸州の課の調(調發の意)の無き處、及び課ある州も管戶數

の少なきものは、官人の祿力（即ち幹や）^{（事力など）}は、乗前已來、隨近の州より出だす。云云」とある如く、課の字を用いている。かく隋時代の課の用例に雜役^{（色役或は雜色）}（役とも言う）を特に意味するものがあるを知つていた私は、今、隋の前で晋の後である兩魏の戸籍に、課と雜役及び兵役との關係を示す重要な上述の如き記事があるに氣づき、課の意味の變遷が極めて明瞭になつて來たことを覺えるのである。即ちそれは均田法の最初をなす晋時代の稅役制度では、課は力役を意味していたものが、北魏が又均田法を行い、これに伴う稅役制度を實施するに際しては——すくなくとも北魏末期の頃には——課は周禮の胥徒の系統に屬する雜任役や兵役の如き力役の特殊なものを意味するようになり、この雜任役や兵役が合體して雜役^{（色役或は雜色）}（役とも言う）となつて雜徭の系列に加わり、その特殊なものとして存在するに至つた唐ではそれまで雜役の代名詞であつた課を借りて、廣く雜徭全體の代名詞となすに至つたと言ふことである。唐代の雜役^{（色役或は雜色）}（役とも言う）の代價を資課と稱するのは、本來の課の意味を保持しているものであり、資課とは「課をたすける」との意に他ならず、錢物を以て課の實役に従う代りのものとす

る意に他ならない。資課が雜役も含めた雜徭全體の代價の意味にまで發展したか否かは、不明であるが、しかし課の意味の發展から考えると、そのようなこともあり得ることである。唐代の資課については鞠清遠氏著唐代財政史第五章第一節「色役與資課」や陶希聖・鞠清遠兩氏共著唐代經濟史第七章第四節「色役與資課」にも詳論されている。

四 課の解釋について我が東洋史學者に望む

私は今回兩魏の戸籍に現われている新事實によつて、晋の占田・課田法に見える課をば力役と解することから、唐の均田法に現われる課役・課口不課口・課戸・不課戸などの課をば、雜徭と解するに至たる變遷の道程を明かにすることが出來た。兩魏の戸籍には種々新しい事實が記載されていて、これは中國の均田法、更にはこの影響をうけた日本の班田收授法の研究には缺くことの出來ない重要な史料なのである。北魏の均田法の實態がよく記載されている。特に課は何を意味するかは、極めて明瞭に示されているのであつて、本論で取扱つたこの戸籍文書の第五枚には、本論文中に掲げてあるを見れば判る如く、雜任役の負擔者と

しての課丁男のことが記載せられている外に、不課戸や位官者として課役が免ぜられて不課口となつている臺資が、税租を負担している事實が記載されて居り、又本論文には引用しなかつたが第六枚には「都合調布參拾參匹參丈捌尺、五匹臺資」とあつて、同じく課役を免ぜられて不課口となつている臺資が調を負担している事實が記載されて居り、第十二枚には戸主劉文成が蓋冠將軍となつたがために臺資となり、家族七人が全部不課口として記載されているが、その戸籍に「計布一匹、計麻二斤、計祖(租の字)四石」とある如く、この劉文成一家は租も調も負担させられている事實が見えている。又一方、本戸籍文書には他に多くの課口・課戸が租と調とを負担している事實も記載されている。これ等の諸事實を總合して判斷すれば明かな如く、課役・課口・不課口・課戸・不課戸の課は調や租とは無關係であることを示して居るのであつて、仁井田陞博士や鈴木俊氏を始めとする課即租調論者及びその同調者達が盛んに唱える所の課は租と調とであり、従つて課役とは租と調と庸(役即ち歲代償)とであるが、その三者を負担するのが課口であり、それを負担しないものが不課口であるとす學説は、この

兩魏の戸籍の出現によつて、それが全くの誤謬であることが極めて明白となつたのである。課即租調論の巨頭である仁井田陞博士は、史學雜誌第五十六編第三號所載同氏論文「唐律令上の課役制度——曾我部教授の新説を讀みて——」の頁九で、

唐令によると、いふまでもなく視流内九品以上の官、定年に滿たざる男子、及び老男、廢疾、部曲客女、奴婢は不課口である。その不課には力役を含むことに就ては問題はないが、租調をも含むとしなければ、官吏(5)をはじめ老男、妻妾、部曲奴婢等は、如何なる直接の規定があつて、以てその租調の負擔を免除されることになるのであらうか、解釋がつかないといはねばならぬ。

と述べて、不課口は租調庸の負擔はないと確言して居るのであり、他の巨擘鈴木俊氏は東亞第七卷第九號所載同氏論文「唐代の戸籍と税制との關係に就いて」の頁一一四で、課役とは均田制と密接不可分離な關係にある租庸調三者の負擔をいひ、二十一歳以上五十九歳迄(此の年齢は時代によつて多少の相異がある)の丁男にして百畝の田を受ける者は何れも此の義務を有し、通典七卷食貨七丁中の

條に「戸内に課口ある者を課戸となし、課口無き者を不課戸となす」と見え、課口とは租庸調三者の義務を有する者を言ひ、不課口とはその三者の義務の全然無い者を言ふ。

と述べて、仁井田博士と同様に課口は租庸調の負擔者、不課口はこの三者の非負擔者であると明瞭に定義している。

他にもこの二氏と同様な定義をなす學者達があり、又これ等を強力に支持する多くの學者達も存在する。我が東洋史學界の主流は擧げてこの學說の主唱者か乃至は遵奉者であると稱しても過言ではない。これ等の學者達が唱えるこの課は租調であると言う學說が正しいものであれば、敦煌發見のこの兩魏の戸籍に記載されている如き不課口・不課戸が租調を負擔すると言う事實は絶対に無い筈である。仁井田・鈴木二氏は上記引用の如く不課口は庸の外に租調も負擔しないものであるとはつぎ、言つて居る。而も仁井田・鈴木二氏を始めとする課即租調論者、並びにその同調者達はいずれも敦煌文書には極めて親炙している人々であり、敦煌戸籍を最も高く評價している人々であり、この兩魏の戸籍は課即租調論の忠實な同調者である山本達郎博士によ

つて新たに我が學界に紹介された事實も十分知つてゐる人であり、又この兩魏の戸籍に現われている課について速かに意見を發表するように私が要求しているのも十分知つてゐる人々である。従つてこの兩魏の戸籍に照して課即租調論が正しいものであるか否かの判定を下し得る最適任者達であり、又それをなさねばならない責務がある學者達でもある。然るにも拘らず、これ等課即租調論者及びその同調者達は、この兩魏の戸籍に對しては、一齊にソッポを向けて無關心の態度を採り、今日に至るも我が學界には、これ等學者の中から兩魏の戸籍を取扱う學者が只の一人も現われて來ないのである。それでありながら一方では今以て課は租と調とであると言うことを盛んに主張して居るのである。恐らく今後益々盛んに唱え續けることであらう。

私は課即租調論者及びその同調者達のこの研究態度を極めて遺憾に思うのであつて、このような現象は我が東洋史學界に於いてのみ見られる特異なものであらう。我が東洋史學界にも過去にはこのような現象は決して見られなかつた。取扱えばその主張する課即租調論を直ちに放棄しなければならぬのは、火を睹るよりも明かであるが、そのよ

うな行爲に敢然と出ることこそは、學に志す者の必ず採らなければならぬ研究態度であり、又研究に於けるフェア・プレーとも言うべきものではないかと思う。私はこのことについて課即租調論者やその同調者達にこれまで再三考慮を要めたのであるが、これ等の學者達は全く聴き容れないようである。ここで私の深く憂慮するのは、このような學風が我が東洋史學界を風靡するに至るのではないかと言うことである。我が東洋史學界には、既にこのような研究態度を是認し支援するが如き兆候が現われて來て居るのであつて、これは極めて警戒すべきことであらう。

私はこの際東洋史學關係各位に衷心より望むことは、課に關する諸問題に對して嚴正な態度で解剖のメスを徹底的に入れて貰いたいと言うことである。課役・課口・不課口・課田などは、均田法そのもの、及びそれに關連する稅役法・戶籍法に於いては、重要な制度語であるから、これ等の用語の意味を正確に把握しなければ、均田法及びそれと關連する稅役法・戶籍法を明かにすることは不可能である。これは我が班田收授法に於いても同様である。然るに現在我が東洋史學界で主として行われている課の解釋、更には

均田法・稅役法・戶籍法についての諸學説は、主として仁井田・鈴木兩氏等課即租調論者やその同調者のものであり、兩氏等の學説を基礎として、それから發展せしめたものが殆んどである。この基礎學説たる兩氏等の研究が正しいものであり、良心的なものであり、責任が持てるものであるならば、兩氏等が主張するが如き文献が現われて來る筈であり、必ず用いなければならぬ史料でもソッポを向けなければならぬと言ふような事態は起らない筈である。

出發點を誤れば如何に努力しても、それは徒らに誤りを大にし且つ深くするだけであつて、却つて學問の進歩發展を著しく阻害する結果を招くこととなるから、現在我が東洋史學界の各位が多く據り所としている仁井田・鈴木兩氏などの諸研究に對して、この際原文原典や關連せる諸學者の論文を十分に咀嚼參照しながら、詳細な批判檢討を加えて貰いたい。そうすれば、これ等の人々が現在我が學界では東洋史學ならでは見ることの出来ないような非學者的研究態度を採る理由が、必ず判るであらう。これが判つてから、初めて晉の占田・課田法から唐の德宗の兩稅法實施まで續いた中國の均田法及びそれに關連せる諸制度の眞の研究

がなされるものであるを、私はここに確言するのである。

私はここ十數年來、課役・課口・不課口・課田の解釋を始めて、均田法及びその稅役法・戶籍法についての從來の解釋が誤つてゐる事實を指摘して、これが訂正をば我が東洋史學界各位に要求して居るのであるが、遺憾ながら多數からは納れられず、現在尙お仁井田・鈴木兩氏等の誤つた學說が我が學界を支配して居る有様である。これは一つはこれ等の人々が非常に宣傳に力を致すが故ではないかとも思われる。これ等の人々は單に論文だけでなく、他に幾多の事典類や概說書などを次ぎ次ぎと編纂し著作して、全く寧日が無いであろうと思われる程の大活躍をされて居るが、それ等の中に記載されるものは専ら自說のものであり、自說に都合のよいようなものであり、反對學說には無根の事柄をさえデッチ上げてそれを材料にして大膽且つまことしやかな反駁をさえ加えて居る有様である。これ等が我が學界や一般社會に及ぶ影響感化は測り知ることの出来ないものがあるが、この影響感化によつて我が東洋史學者の多くが、自然とこれ等課即租調論者及びその同調者達の言行を、無批判・無條件で受け容れるに至るのではないか

と、私は思つて居る。南宋の大儒、朱熹が朱子文集卷四十八答呂子約で「大凡そ書を讀むには、須らくこれ心を虚しくして以て本文の意を求むるを以て先とすべし」と言われている如き態度をば、この際我が東洋史學者各位が採られ、課即租調論者などの影響感化の外に立つて、全く白紙の立場で中國均田法關係の諸文献に臨まれることを、私は切に各位に望むのである。

私は最後に斷言して置くが、現在我が東洋史學に載せられて定説となつてゐる中國中世の田制・稅制・戶制と言うものは、課即租調論者とその同調者によつて、中國の中世には實在しなかつたものが描き出されて居るのである。私のこの斷言が誤りであるか否か、無根の事柄であるか否かは、課即租調論者とその同調者達の研究態度を観察すれば自から明かとなるであらう。中國中世の田制・稅制・戶制は、中國だけではなく、日本を始めとする近隣の諸國にも影響を及した重要な東洋史上の諸事項である。當時の律令は均田法を中心にして編纂されたと言つても、決して過言ではないのであつて、これは當時の律令を見れば自から諒知されるであらう。我が東洋史學界の各位が、速かに中國

中世の田制・税制・戸制について正確な知識を修得されて我が東洋史學の發展に貢獻されることを、私は同じ東洋史專攻の一員として、各位に切望してやまない次第である。

註

(1) 宋の差科については、李燾の續資治通鑑長編卷三八八、哲宗元祐元年九月丁丑の條に、吏部侍郎傅堯俞言、竊謂、鄉村以丁出力、城郭以等第出財、謂之差科、相與助給公上、古今之通道也とある如く、鄉村は力役により、都市は財力によつて官に奉仕するを差科と言ふとある。しかしこれは差科の意味を廣くしたのであつて、純粹の意味の差科は鄉村の力役の催課を言ふのである。續資治通鑑長編卷三九四、哲宗元祐二年正月辛己の條に、殿中侍御史孫升言、(上略)而差役之法、行於鄉村而不及於城郭、(中略)城郭之民、祖宗以來、無役而有科率、科率有名而無常數、(下略)とある如く、都市の財力による公上奉仕は、これを科率と稱せられたのである。

(2) 私は既に日本歴史第一一七號(昭和三十三年三月號)にも發表して置いた如く、昭和三十三年一月に東京高島屋で開催された敦煌藝術展の出品物の一つである第二八五窟の模型にあつた壁畫には、大統四年及び大統五年の年號が記されていた。大統四年は西曆五三八年であり、五年は五三九年である。この兩魏の戸籍が作られた西曆五四七年よりは八、九年前に當たる。八、九年前に既に西魏の年號である大統が敦煌の壁畫に用いられていることは西魏の支配權が既に敦煌地方に及んでいたことを示す

のであつて、從つてこの戸籍の作られた時は勿論西魏の支配下にあり、西魏の制度によつて作られたと見做さなければならぬこととなる。しかしこの戸籍の内容が示す事實は、私が既に屢述べて置いた如く、北魏・東魏・北齊の系統に屬するのである。中國では「正朔を奉ず」との言葉がある如く、年號さえ用いれば統治權が及んだこととなるのであつて、この場合も單に年號のみを用い、西魏の制度は未だ及んでいなかったのである。故にこの戸籍を西魏の戸籍と呼べば誤解を生ずるを以て、矢張り兩魏時代の戸籍とするのが穩當な稱呼である。更にはこれを西魏の計帳などに見做すのは全く目標がはずれた見解である。

(3) 唐の戸籍に租を記載してあるのは、那波利貞博士の歴史と地理第三三卷に載せた論文「正史に記載せられたる大唐天寶時代の戸數と口數との關係に就きて」の中に紹介されている佛國々立圖書館所藏の戸主王萬壽の戸籍に「計租二石」とある一例が昭和九年頃から知られていたが、昭和三十一年十一月發行の東洋文化研究所創立十五周年記念論集(東洋文化研究所)に載せられている山本達郎博士の論文「敦煌發見戶制田制關係文書十五種」には、新たに戸主邯壽壽の戸籍に「計布二丈五尺 計麻三斤 計租二石」とある所の租と調とが記載されているものが紹介された。

(4) 難任の唐律に見えている例を挙げるならば、唐律の職制律だけについて見るも、その官有員數の條文「諸官有員數、而署置過限、及不應置而置、調非奏一人杖一百、(下略)」とあるに對する疏議は「官有員數、謂内外百司雜任以上、在令各有員數、(中略)注云、謂非奏授者、即是視六品以下、及流外

雜任等、所司判補」と説明し、同じく職制律の官人無故不上の條文「若因假而違者、一日笞二十、(下略)」とあるに對する疏議は「官人以下、雜任以上、因給假而故違、並一日笞二十、(下略)」と説明し、同じく職制律の役使所監臨の條文「即役使非供己者、非供己、謂流外官及雜任計庸坐贓論罪、止杖一百、其應供己驅使、而收庸直者罪亦如之」とあるに對する疏議は「非供己、謂流外官者、謂諸司令史以下有流外告身者、雜任謂在官供事無流外品、(中略)其應供己驅使者、謂執衣・白直之類、止合供身驅使」と説明している。次に唐令を見るに、これにも多くの例があるが、ただ一つ重要な例のみを挙げよう。それは我が養老の賦役令の春季條文にある集解古記云に、「開元式云、(上略)一依令、授官應免課役、皆待銅符至然後注免、雜任解下應附者、皆依解時月日據徵(中略)一防閑・疾僕・邑士・白直等、諸色雜任等、合免課役」とある。以上舉げた唐律令の條文の中で、律の役使所監臨の本注には、雜任を「官事に供すべきもの」と言い、疏議は「官に在つて事に供すもの」と言つて、雜任は官廳で義務的に執務するものと説明している。更に疏議はここで執衣・白直の類は個人に與えられる使役人であるとして、雜任とは區別している。この區別は、右の唐令の例として舉げた集解古記に引ける開元式の中にある令の條文と思われるものにも「防閑・疾僕・邑士・白直等、諸色雜任等、云云」とある如く、防閑・白直などの官員個人の使役人と雜任とは明かに區別している。即ちこれによつて知られるのは、唐の雜任は専ら官廳に奉仕するものを稱したのである。雜任は又唐では流外官と共に職掌人として總稱される場合もあった。そ

の例は通典の職官篇や、大唐六典の戸部などに見えている。更には又この雜任の例でも、課役は力役と解さなければならぬことが判るのである。それは右に掲げた開元式云に「一防閑・疾僕・邑士・白直等、諸色雜任等、合免課役」とあつて、雜任は課役を免ぜらるべきものとなつてゐる。これは雜任の身は既に雜徭の特殊な役である雜役に服しているから、他の雜徭や蔽役を免除すると言ふに他ならない。この雜任には免除される課役の語に對して、唐律疏議では役使なる語を當ててゐる。即ち唐律の詐僞律、詐自復除の條「即所詐得復役使者、徒一年」とあるに對する疏議の説明は「謂うは、詐つて雜任の類となり、役使を復免せられるを得し者は、徒一年なり」とある。雜任は上述の如く課役を免ぜられるのであるが、雜任と詐つて役使を免れると言ふのであるから、課役は役使に當り、課役が力役であるは、このことでも明かにせられる。更には又、これ等雜任の出身については、私は明かにすることは出来ないが、これ等と類似的親事帳内については、大唐六典卷五兵部に「凡王公已下、皆有親事帳内、六品七品子爲親事、八品九品子爲帳内」とある如く庶民の出身ではなく、上流から出て居ることからして、雜任もその出身は庶民以上のものであつたらしい。我が令制の雜任も矢張り下級の有位者の家から選ばれてゐる。又既にこの註の初めに掲げた職制律の疏議に「流外雜任、所司判補」とあるのや、資治通鑑卷二百唐高宗紀顯慶二年の記事の終りの所にある胡三省の註に「雜色補官者、謂之流外官」とあることなどから考えると、雜任は流外官の下に位して、義務的に官廳で執務してゐたものである。我が養老の職官制では、この雜

任の下に諸國から點定進上した仕丁即ち直丁・驅使丁があり、これは庶民が専ら役使に供されたのである。唐の制度にもこれに類する驅使・門僕の徒があつたが、その差出方法についてはこれを傳える文献がなく、全く判らない。第一節で傳えて置いた所の北魏の更卒、北齊の曹兵は、唐の驅使・門僕、我が仕丁の根源に他ならない。

(5) 官吏をはじめ老男、妻妾、部曲奴婢等は力役の外に租や調までも免除されると言う誤つた知識をこのように仁井田博士が持つて居ることが、そもそも同博士が課を租調と誤解する出發點をなして居る。同博士はその著の唐宋法律文書の研究、支那身分法史、中國法制史などでも同様なことを述べて居るが、これは全くの誤りであつて、中國の身分法では、周禮の施舍の制度から清朝の滅亡に至るまで、原則としてこれ等特殊階級の人々には、力役だけが免ぜられたのであつて、租税は免ぜられなかつたのである。周禮時代に無くて後に發生した僧侶道士や科擧の志願者、さては大学生などいづれも力役免除の特權だけを持つていた。しかし仁井田博士らが主張するこれ等特殊階級は力役の外に租税も免ぜられると言う誤つた知識は、現在我が學界では殆んど學問上の常識となつて居るのであつて、これは私の極めて遺憾とし慨嘆する所のものである。これについては、徳川時

代では藤田幽谷が正確な知識を持つていたのであり、それは彼の著書「勸農或問」を見れば判ることであるが、近頃では狩野直喜先生がこれについては實に該博な正しい知識を持たれていた。私は狩野先生から直接教えを受けたのである。現代でも唐代史の那波利貞博士、宋代史の周藤吉之教授、明代史の小畑龍雄教授などは、各専門の分野に於いて、これ等特殊階級の身分法について、正しい知識を持たれて居る。又故加藤繁博士も正しい知識を持たれていた。位官者・老人・子供・疾病者・女子・學者・僧道などの身分法について、東洋史學界各位が速かに調査されることを、私は切に望む次第であつて、これさえ明かなれば課の諸問題は自から解決されるものである。それには先ずこの制度の起源をなす周禮の施舍と禮記の王制篇の選士・俊士から始めて貰いたいのである。

昭和三十三年七月十六日稿了。

附記 本稿は史林に掲載する旨、昭和三十三年十一月發行の日本歴史第百二十五号所載拙稿「我が古代の雜任と雜色人と入色者について」に豫報して置いたが、都合によつて本誌に載せることに變更した。

of family system during the Han dynasty was the three-families system, but I must confess that his theory is already untenable in the light of the more detailed study which I hope to have attempted in this paper.

**The Relation between the Population Registers in the Liang Wei 兩魏
Period with the Labour Conscription Record in T'ang 唐, and
the Changes in the Sense of K'o 課**

Shizuo Sogabe

Many population registers have been discovered at Tunhauug 敦煌 and reviewed in the academic journals, but we have not found the account of corvée in these documents yet. However, the description of corvée can be found in the register documents of the Liang Wei period which have also been discovered at Tunhung and have recently come to our knowledge through the journals.

The present paper is an attempt to elucidate the difference in connection with the labour conscription record in T'ang, and the changes in the sense of k'o.

A Note on Hsiao-Wang-Tzu 小王子

Junpei Hagiwara

The word hsiao-wang-tzu designates the whole heads of the tribes which were active in Mngolia in the late Ming 明 period. Dayan Khan and Altan Khan were their successors and one of their clans unified Mongolia. It has been said that the hsiao-wung-tzu tribe was engaged in constant struggle against the Oirats in the process of unification of Mongolia. But according to Ming Shih Lu 明實錄 (The Veritable Records of the Ming Dynasty), the hsiao-wang-tzu kept intimate co-operation with the Oirats through of Ismael in the formative period of the Ming Empire. The situation is made clear not only in the civil war in Mongolia but in its relation with China. The character of hsiao-wang-tzu was different from that of the head of the Tartars at the beginning of Ming.